

【企画分析会議構成員コラム3】

科学警察研究所 藤田 悟郎

犯罪被害者の効果的な支援を実施するには、被害者の実態を調査した結果に基づき行われるべきという点に関して、被害者支援を専門とする学者の間で異論はないと思います。しかし、このことを言うのは易しいのですが、実際に行うのはさまざまな困難を伴います。

とりわけ、犯罪被害者の調査では、体験した被害について聞くことが、事件のことを思い出させる等の二次被害に繋がる可能性もあるので、調査の手続きを慎重に考える必要があります。また、調査を設計する立場から言うと、調査の目的を絞り込んだ上で、同じ条件に該当する対象者をできるだけ多く集めるのが良いのですが、犯罪の被害は多様であり、かつ、さまざまな施策が実施されている中で、調査に対するニーズの多さと調査の設計を両立させるのは容易ではありません。

このようなさまざまな制約がある中、今回の調査では、パネル調査として、115人の犯罪被害者の方に3年間の追跡調査を行うとともに、WEB調査として、654人の全国の犯罪被害者の方と、700人の一般の方に、生活の様子等を比較するための調査を実施することができました。この調査の目的であった、犯罪被害者が置かれている立場について、あるいは、犯罪被害者が現在の支援の施策をどのように評価しているかについて、客観的な資料を提供できたと思います。

もっとも、パネル調査では性犯罪の被害に遭った回答者が少なかったとか、全国の犯罪被害者を対象とした調査をWEB調査の方法で行ったため、想定する母集団がいまひとつ明確でないとか、あるいは、それぞれの施策の効果を検証するには、別な方法による調査が必要等の課題があったのも事実です。これらの点については、次の基本計画のもとで実施されるだろう、次回以降の調査に反映されるものと期待します。

調査を担当した企画分析会議は、民間の支援団体、被害者の自助グループ、行政担当者、法律、精神医学、心理学の専門家等、被害者支援に関わるメンバーで構成されていました。調査は、明確なニーズや問題意識と、調査に関する高い技術が融合して、はじめて意味を持つものであると、私は考えています。その意味で、ニーズを熟知し問題意識が高い実務家や学者と、調査の実施に詳しい専門家が協力して今回の調査が実施できたのは、非常に良かったと思います。毎回の企画分析会議に出席し、他の委員の意見を聞き、議論に参加できたのは、個人的に、とても有意義な体験でした。この調査を通じて、犯罪被害者支援の重要性を改めて認識するとともに、より良い支援の実現に微力ながら貢献していきたいという決意を新たにしました。